〈二つのドイツ〉を通してみられるヨーロッパ像の光と影

―― 哲学者エルム・カロの場合[1] ――

山口信夫

I

〈二つのドイツ〉とは、もちろん統一以前の東西ドイツを意味するのではない。その一方はカントやゲーテによって示される感性と平和のドイツ、他方はヘーゲルとビスマルクに示されるダイナミックに拡大する好戦的なドイツである。こうしたフランス側のステレオタイプともいえるドイツ観は、それぞれ、スタール夫人の『ドイツ論』(1813, 1814)とハインリッヒ・ハイネの『ドイツ文学の現状』と『マルティン・ルター以降のドイツ論』(1833, 34)に起源をもつ。しかしながら、十九世紀フランスを通じて、この〈二つのドイツ〉という思想上のトポスが安定して存在しつづけたわけではない。これは1870年9月2日、独仏(普仏)戦争の敗戦という未曾有の危機を契機として、過去遡及的にフランスの知識人層に形成されたイデオロギー的見解なのである。

この対立的見解を〈二つのドイツ〉と命名し、最初に展開した人物が、哲学者エルム・カロ Elme CARO(1826-1887)である。雑誌『両世界評論』の1871年11・12月号に「二つのドイツ」[2]が発表され、翌1872年の『試練の日々』[3]に再録される。オーストリアに対するサドワでの勝利(1866)以来、ドイツ統一をもくろむプロシアとビスマルクにとって、最大の障害はフランスとナポレオン3世であり、それ故に、両世界の関係は悪化の一途をたどっていく。1879年7月13日のエムス電報事件を契機に、ナポレ

---

[1] 本稿の意図は、十九世紀フランスに成立した〈二つのドイツ〉という主題を通して、ヨーロッパという概念がどのように変化したか、その光と影はどのようなものであるかを解明することにあった。しかし予定していた主題の一部(哲学者カロ)しか論じられなかったために、影の部分がクローズ・アップされることになった。その光の部分を、たとえ輝かしいものではないまでも、エルネスト・ルナンを論じることで描こうと思っていた。しかし、紙幅と時間の関係で、ルナンについて論じることができなくなった。注48を参照。

[2] CARO(Elme); "Les Deux Allemagnes. Madame de Staël et Henri Heine", in: *Revue des Deux Mondes*, 86(nov.-déc.,1871), pp. 5-20.

[3] CARO (Elme); *Jours d'épreuve 1870-1871*, Hachette, 1872, pp. 5-38.

オン3世がプロシアに宣戦布告を行い、独仏（普仏）戦争は始まる。プロシア軍の圧倒的攻勢下、9月2日、皇帝ナポレオン3世のスダンでの降伏で、第2帝政が崩壊する。9月4日、第3共和制となったフランスは、フランス各地でドイツ軍に抵抗するが、結局1871年1月28日、終戦協定を結ぶ。一方で、対独抵抗を主張して3月18日に成立したパリ・コミューンが5月終わりに完全に鎮圧される。その過程で、2月26日のヴェルサイユ条約、5月10日のフランクフルト条約により、独仏戦争は終結する。その結果は、アルザス・ロレーヌの割譲と莫大な賠償金であり、フランス国民のドイツに対する〈対独復讐la Revanche〉の怨念である。独仏戦争が終結して約半年後、哲学者カロが、敗戦の原因究明のために、フランスが十九世紀においてドイツをどのように理解していたかを考察しようとした。

カロとはいかなる人物か。彼の名は現行の最良の『哲学者事典』[4]にももはや見出されないが、十九世紀から二十世紀初頭に編集された百科事典[5]などに、彼の名が明記されている。そのうち、化学者ベルトロの編集になる『大百科事典』の記述は詳細にわたる。彼は今日では注目されることはないが、当時は学会ばかりかジャーナリズムにも著名な哲学者である。

エルム＝マリー・カロ[6]は1826年3月4日、ポアチエで生まれ、1887年7月13日、パリで死去した。コレージュ・スタニスラスで学んだあと、エコール・ノルマルに入学、1848年、哲学教授資格試験に合格、アルジェ、アンジェ、レンヌ、ルアンのリセで教鞭を執り、1853年に、『セネカの幸福な生活について』と『十七世紀の神秘主義ーサン・マルタンの生涯と学説の試論』で博士号を取得、同年、ドゥエ大学文学部に着任、その雄弁で評判を得た。著作『現代の道徳研究』でアカデミー・フランセーズの賞を得、パリに戻る希望を示した。1858年、リセ・ボナパルトに着任しその希望が

---

4 *Dictionnaire des philosophes,* dir. par Denis HUISMAN, 2e éd., P.U.F., 1993.

5 **Dictionnaire universel des contemporains, contenant toutes les personnes notables de la France et des pays étrangers...,* éd. par VAPEREAU (Gustave), Hachette, 1858.

**Grand dictionnaire universel du XIXe siècle,* éd. par LAROUSSE (Pierre), Administration du grand Dictionnaire universel, 1866-1877, suppelément, II.

**La grande encyclopédie, inventaire raisonné des sciences, des lettres et des arts, par une société de savants et de gens de lettres*; sous la dir. de MM. Berthelot,... Hartwig Derenbourg,... F.-Camille Dreyfus,... A. Giry,... [et al.], H. Lamirault : [puis] Société anonyme de "La Grande encyclopédie", [19??]

6 『十九世紀ラルース大百科事典』は、エルム・カロの名前をエドムEdmと誤記している。この著名な百科事典は、その誤記、不正確さでも有名で、この点でベルトロの『大百科事典』に劣ると言えよう。

叶えられ、すぐさま、エコール・ノルマルでの講義も担当、さらにソルボンヌのアドルフ・ガルニエの代理教授となり、同時にパリ大学区の視学総官となった。1864年、ガルニエの死去とともに、正教授に就任し、69年には倫理学・政治学アカデミー会員、74年にアカデミー・フランセーズ会員となり、およそ学者が望みうるすべての名誉を得た。帝政下で雑誌『ラ・フランス』、さらには『ヨーロッパ雑誌』、『ジュールナル・デ・サヴァン』、『両世界評論』などに寄稿し、『唯物論と科学』(1868)、『十九世紀のペシミスム』(1878)、『リットレ氏と実証主義』(1880)、などの哲学、倫理学に関する著作をなす一方で、『ゲーテ哲学』を著すなど多才ぶりを示した。晩年、『自然と神』(全3巻)、『人間の運命』の2大著作を構想していたという。

彼は独創的思想家というより博学多才の人物と評価され、ヴィクトール・クーザンの折衷主義を様々な分野で応用展開した人物である。彼の講義の成功は華々しくかつ世俗的であったために、当時の流行劇作家パーユロンの代表作、『うんざりする世界』(1868年、初演)で揶揄されるに至った。哲学者ベラックは公爵夫人のサロンで仕切る役を演じ、そのことばや冗談でご婦人方をうっとりさせる。「考えていることは決して語らず、語っていることは決して考えない」社交界のサロンは、哲学者も巻き込んで皮肉とからかいの的にされる[7]。十九世紀フランスの〈十字架と三色旗〉の対立の中、カトリック勢力に対抗し哲学教育を通じて近代化を意図したクーザンの世俗主義が、このカロのうちにも生きつづけた。

対独戦争敗戦を契機に生まれた〈対独復讐〉は、単なる憎しみの情念を意味するだけではない。この情念の核心は、悲劇を導いた過ちに対する贖罪意識と悲劇の原因の探求意志にある。またこの情念から生じた事柄は、第二帝政の前提であった政治的、哲学的普遍主義の見直しと、さらには具体的施策としての教育と軍隊の改革であった。[8] カロの〈二つのドイツ〉論もまた、〈対独復讐〉に先鞭をつけた仏独比較文明論である。

対独敗戦の半年あとに『両世界評論』に発表された「二つのドイツ、スタール夫人とハインリッヒ・ハイネ」は、翌年、『試練の年』に再録されるが、その冒頭に「戦争と政治において自分の敵を知ること、それこそが知恵の始まりである」[9]という一文

---

[7] LAFFONT-BOMPIANI; *Le nouveau dictionnaire des œuvres de toute les temps et de tous les pays,* Robert Lafont, 1994, et *Dictionnaire des œuvres littéraires de la langue française,* éd. par Jean-Pierre de BEUAMARCHÉ et Daniel COUTY, Bordas, 1994.

[8] *Dictionaire de l'Histoire de France,* sous la dir. de Jean-François SIRINELLI, Larousse, 2006, p. 982.

[9] CARO, *Jours d'épreuve 1870-1871,* p. 5.

が付加された。それが当時の〈対独復讐〉の情念を如実に示している。しかし排他的な復讐心が彼を支配しているのではない。むしろこの情念は己に、フランス自体に向けられる。「個人の生活や国家の活動に突然降り注いだ」「大きな不幸」、「運命」、「恐ろしい現実」、「鉄のくびき」、「われわれはその不幸な作り手なのだ」[10]。「そのようなとき、悲劇にさいなまれたある種の好奇心、過去の流れをさかのぼろうとする激しい欲求が感じられ、その時によく理解できなかった警告や見損なってしまった予兆を捉えようとするのだ。[11]」〈対独復讐〉の本質である悲劇に対する贖罪の念とその原因究明の意志が、ここに示される。カロの〈二つのドイツ〉論は、彼の世俗的名声や敗戦後半年という早い時期に書かれたことをも考慮に入れれば、〈対独復讐〉の基本的文献と考えることができる。

Ⅱ

カロの「二つのドイツ論」の主題は、スタール夫人とハイネ両者のドイツ論を二つの典型的なドイツ観とみなし、それらを批判することにある。まず、「彼らはその視点ばかりか、文体や論の形式においても、まったく異なっている」[12]と断じ、両者の相違、すなわち〈二つ〉のドイツ論の可能性を指摘する。はじめに取り上げるスタール夫人のドイツ論が、1870年に至るまでのフランスにおけるドイツ観の誤解を生み出したと、カロは批判する。「スタール夫人はドイツ民族について少々空想的な観念、理想idéalをわれわれに与えることに成功しただけだ。」そればかりか、彼女の記述が不完全で不鮮明であると難じる。「不完全な素描で、いくつかの点で曖昧で混雑しており、意図の明確な素描というよりは色彩豊かなそれであり、一民族の真実な肖像よりは幻想に満ちた輝かしい素描である。」[13] 全体として、ドイツ民族についてあやまったイメージをフランスに与え、その細部において不正確であいまいな情報を提供したと総括する。その原因を、彼女の意図と才能にもかかわらず、スタール夫人が置かれた状況に求める。

スタール夫人のドイツ論は、その誕生の数奇な運命、さらに彼女の名声によって、

---

[10] "Les Deux Allemagnes. Madame de Staël et Henri Heine", in: *Revue des Deux Mondes,* 87 (nov.-déc., 1871), p. 5.

[11] *Ibidem.*

[12] *Ibidem.*

[13] *Ibidem.*

フランスにおけるドイツ論の古典となった[14]。旧体制下、フランスの財政改革に腐心したジュネーヴの銀行家ネッケルの娘として生まれ、母、シュザンヌ・ネッケルの主宰するサロンで啓蒙思想に触れたスタール夫人は、革命当初、フランス革命に同調するものの、革命の過激化とともに距離を置き、ナポレオン体制下では、1802年、モロとベルナドットらの反ナポレオン陰謀に与し、翌年パリから40マイル以内に近づくことを禁じられ、10月、バンジャマン・コンスタンとともにドイツに向かう。10月26日から11月８日までメスに滞在し、カント哲学のフランスへの紹介者シャルル・ヴィレールに会い、『ドイツ書簡』を構想する。さらにフランクフルトに向かい、ワイマールに滞在し（1803年12月13日～1804年３月１日）ゲーテ、シラー、ヴィーラントらに会う。1804年には、シュレーゲル兄弟の兄アウグスト＝ヴィルヘルムに子どもの教育を依頼、父の死に際してスイスのコペに戻るが、年末にはシュレーゲルとともにミラノ、翌年ローマ、ナポリ、ヴェネチア、ミラノと、イタリアを旅し、1807年、コペに落ち着いて、『ドイツ論』を執筆する。1810年４月、ブロアのショーモン邸に滞在、９月23日、フォッセ邸で『ドイツ論』の校正を行う。９月24日、フーシェの後任となった内務大臣ロヴィゴ公爵サヴァリは、皇帝の命を受け、彼女に24時間以内の国外退去を命じ、校正刷りの廃棄処分と原稿の没収を行う。1811年５月、シュレーゲルは密かに校正刷りの一部をウィーンに持ち出す。1813年、ロンドンでフランス語による『ドイツ論』がマレー書店から、1814年４月６日にはニコール書店からパリ版の『ドイツ論』がついに刊行される。[15]

カロはこうした事情をもちろん簡潔に述べ、夫人の『ドイツ論』の成立を紹介するのであるが、その叙述は皮肉と多少の悪意を交えて行われる。当時、「ドイツをフランスに知らしめるという重要な計画」、さらに「フランス人にとってナイル川の源と同じほど未知であった」「ドイツ文学の源泉自体の探究」を夫人は試みたと、その企図の雄大さを茶化してみせる。また、ワイマールでのシラー、ゲーテとの会見について、シラーは彼女に会うのに不安を感じ、いやがっていたこと、またゲーテは彼女に会いたくないと逃げ回っていたエピソードを披露する。スタール夫人のドイツ旅行は、

---

[14] フランス国立図書館の蔵書目録(Catalogue BN-OPALE PLUS)によれば、『ドイツ論』は十九世紀を通じて多くの版が刊行されている。煩雑を避け、その年代だけを記す。1810, 1813, 1814, 1818, 1819, 1820, 1820-1821, 1823, 1828, 1835, 1839, 1842, 1843, 1844, 1850, 1852, 1866, 1878, 1888.

[15] Madame de STAËL, *De l'Allemagne,* Garnier-Flammarion, 1968, pp. 10-13; (Chronologie) et *Preface,* pp. 37-43. スタール夫人、梶谷温子他訳『ドイツ論Ⅰ』（鳥影社）2000、７-19頁。DIDIER (Béatrice) ; *Madame de Staël,* Ellipses, 1999, pp. 92-95.

十八世紀パリのサロンの女王であり、また第一統領（ナポレオン）との確執のために国外追放されたという二つの評判の故に、実際以上にドイツで過大視された事情が述べられる。要するに、夫人のドイツ旅行は、「女王の、思想の女スルタン」の凱旋であり、「このような旅行はもはや輝かしい虚構にすぎない」[16]と断じる。彼女の作品内容を分析する以前に、彼女の国外逃亡とドイツ旅行だけで、『ドイツ論』の評価をまず行う。

つづいてカロはスタール夫人の『ドイツ論』をその内容に即して分析、批判する。まず、ドイツ哲学と宗教の紹介に関しては、彼女の理解は皮相ではあるが、釈明できるものだとする。その理由は、「こうした困難な主題の解明には、彼女のあとにつづく多くの世代の思想家と学者を必要とする」ためである。ドイツ思想を理解するために、その体系の批判的・哲学的解釈、説明、解説という作業が30年間、２つ、３つの時代を通じて行われてきたが、それでもなお曖昧な問題に関しては決定的な解釈に至っていないと、ドイツ思想のフランスへの導入の困難さを指摘し、夫人の「皮相な」理解に釈明を与える。この釈明は、哲学者カロ自身の体験に起因する。

フランスへのドイツ哲学の導入とその研究にはそれなりの歴史がある。革命期、テルミドールのあと、体制の構築という観点から1796年にカントの『恒久平和論』が翻訳されるが、本格的なドイツ思想の紹介は革命後である。スタール夫人の先駆者となったシャルル・ヴィリエールは1801年、『カント哲学あるいは超越論哲学の根本的原理』を著し、スタール夫人が1813年に『ドイツ論』の出版に漕ぎつける。ナポレオンによる高等教育の改革を経て、ドイツ哲学の本格的導入と研究は、ヴィクトール・クーザンによる1817年、ソルボンヌでの講義、さらにドイツ遊学後の1827, 28年のエコール・ノルマル・シュペリエールでの講義から始まると言って過言ではない。彼自身、1829年、ドイツの哲学者、テンネマンの『哲学史教科書』を翻訳し、哲学史の講義を行い、それらを出版し、1857年には『カント哲学』をまとめ、さらに弟子たちに近代的な哲学研究を指導している。そののち、弟子やそれ以外の哲学研究者からドイツ思想研究が輩出する。主なものを挙げれば、1831年、エドガール・キネの『ドイツと革命について』、1836年、ジョゼフ・ウィルムの『ヘーゲル哲学試論』、ジュール・バルニのカント『純粋理性批判』の翻訳、1842年、ピエール・ルルーの『シェリングのベルリン講義』と『シェリング哲学講義について』、1845年、シャルル・ド・レミュザの『ドイツ哲学』、1848年、バルニのカント『実践理性批判』と『道徳哲学の基礎付け』の

[16] CARO, *op.cit.*, p. 8.

翻訳、1855年、オーギュスト・ヴェラの『ヘーゲル哲学入門』、1860年、ポール・ジャネの『プラトンとヘーゲルにおける弁証法の研究』、1862年、フーシェ・ド・カイレユの『ヘーゲルとショウペンハウアー』、1866年、カロ自身の『ゲーテ哲学』などが刊行されている。カロは学者として、1870年に至るまでの、長いドイツ思想導入の経緯を知り、また彼自身がその当事者であったために、スタール夫人のドイツ哲学と宗教の皮相な理解をなじることはなかった。[17]

カロは、スタール夫人がドイツ思想を十分咀嚼できなかった事情を述べるのに対して、彼女のドイツ文学の理解にはその才能を認める。「ドイツの自然のもつ神秘性、ロマネスクなものへの傾向について、伝統とさらに想像力のもつ曖昧な恐怖に対するドイツ文学の表現豊かな趣味について、スタール夫人は〈〈自然の夜の側面〉〉という巧みなことばで呼ぶ。彼女の著作は繊細で鋭敏な観察に溢れ、魅力的なページが止まることなくつづく。・・・彼女は共感とそれに依存する知性をこのうえない高さでわれわれに示している。」「一つの体系、一冊の書物、一つの芸術の理解が深い省察と同様に生き生きとした感性から生じることを、人は知らないのだろうか。この書物を通じて、いまや、熱狂的な魂の息づかいと、いわば寛大さ générosité の流出にわれわれが立ち会っているのを感じる。」[18]このような賞賛のあと、カロはスタール夫人を全面的に批判する。

「あり余る寛大さ、それはしかしながら欠陥である。この書物は過剰なまでに楽天的である。」カロは、夫人のドイツ文学に対する寛大さと楽天性の原因を探る。そしてその原因をまたしても、彼女の状況、彼女の精神状態に求める。「彼女は統領下のフランスに対し、怒りに満ちて、震える魂でドイツに到着した。」彼女がナポレオンとフランス国民に見るものは、「世界の征服に自己の魂を売る」「ファウスト」の「歩み」である。フランス国民は、革命初期にみずからが示した自由な熱狂や革命の理想をすでに忘れている。「この忘れやすい国民に、彼女は一度、大きな教訓と偉大な模範を示そうとした。このために選んだのが、ドイツ国民である。彼らはフランス国民

---

[17] *KNOOP (Von Bernhard) ; *Hegel und die Franzosen,* W. Kohlhammer: Stuttgart und Berlin, 1941, pp. 31-41.

*AZOUVI (François) ; De *Königberg à Paris. La réception de Kant en France (1788-1804),* J. Vrin, 1912, pp. 65-83.

**Philosophie, France, XIX siècle. Ecrits et Opuscules,* Choix, introduction et notice par Stéphane DOUAILLER, Roger-Pol DROIT et Patrice VERMEEREN, Le livre de poche, 1994, pp. 125-148, II "Le passage du Rhin", *Introduction,* par S. D et P.V.

[18] CARO, *op.cit,* pp. 10-11.

と比して、精神主義のもつすべてのすぐれた道徳、英雄的で単純な無私無欲の態度、私的生活同様に公的生活における崇高さを代表しているのでなければならなかった。」[19]ナポレオンとフランスに対する政治的批判をも射程に入れた文化論的批判を、スタール夫人はドイツ思想とドイツ文学を借りて行おうとしたというのが、カロの批判の骨格である。それ故に、カロは次のように結論する。「この固定観念のせいで、彼女が自分の見たいものしか見なかったのは確かである。[20]」夫人がドイツ文学に見た幻想性やロマン性は、ナポレオンやフランス革命に対する怒り、いらだち、恐怖などの対抗感情の形象だというのである。彼女の作品には、「愛国心でもある寛大な怒りがあった。それは祖国への愛でもあろうが、いらだった愛である。」「彼女は忠実に描こうとするのではなく、ジャン・パウルにしたがえば、百科全書派、革命派、そして兵士の唯物論に、この書の描写を通じて抗議している。・・・そしてスタール夫人の想像力と筆から、徹底的に理想主義的で、父権的、熱狂的な新しい『ゲルマニア』が誕生するのを見たわけだ。それは純粋思惟のかまど（源)、無垢な愛の祖国、真の田園詩であり、結局あの偉大な民族のアンチテーゼであった。[21]」タキトゥスの『ゲルマニア』はローマ帝国の堕落を批判する意図で、ゲルマン民族の質実剛健な生き方を賞賛したものとされる意見を採用し、カロはまさにこのスタール夫人の憂国の情を、理想化されたドイツ国民とその思想、文学のうちに見るわけである。それ故に、真にドイツ思想とその文学の客観的な紹介とはなりえず、フランスのドイツ理解を誤らせるものだというのが、カロの結論である。

この結論を受けて、カロはスタール夫人の描くドイツ像と現実のプロシア、1870年、フランスを打倒したビスマルクのプロシアを比較する。「しかしドイツ人の頑固なまでの誠実さ、正義に対する執拗な情熱と同様に著者を魅惑したもの、それは軍国的精神の欠如だ、たとえプロシアにおいてさえも。プロシアにこの欠如を認める者はまちがっている。[22]」

このカロの批判は夫人には過酷すぎないか。夫人の体験したドイツは、1803年から1804年、1807年末から1808年の二度である。プロシアはいまだフランスを打倒できるほどのプロシアではない。プロシアが本格的にドイツ統一を行うのは1860年代であり、彼女にこれを予想しろというのは酷である。十九世紀初頭のプロシアはナポレオンと

---

[19] CARO, *op.cit,* p. 11.
[20] *Ibidem.*
[21] *Ibidem.*
[22] CARO, *op.cit,* p. 12.

の戦いに敗れ、上からの改革を行い、ウィーン会議で得た政治的優位を国力増強に向けていた。カロはスタール夫人がドイツ論に己の姿を映していると非難するが、カロもまた、1870年以降のフランスの現実から夫人のドイツ論を見ていることになる。

スタール夫人の『ドイツ論』とハイネの『ドイツ論』を比較研究した単著では唯一の研究がある[23]。それによると、両者のドイツ論は対立するものではなく、同じ絵の二つの見方にすぎないとする。そのため、夫人に対するハイネの批判は不当であり、夫人のドイツ論の客観性と誠実さを強調する。両者のドイツ論はハイネ（もちろんカロも）が考えたように異なるものではなく、彼らの政治的哲学的見解の相違にもかかわらず、多くの点で一致すると結論する。こうした学術的見解にもかかわらず、カロ（彼もまた哲学者という研究者）がスタール夫人のドイツ論を幻想的で理想主義的な空想の、現にありもしないドイツと規定したのは、彼もまた彼の現実、独仏戦争の敗戦という不幸と悲劇からスタール夫人を評価したためである。

Ⅲ

1826年、ハインリッヒ・ハイネは「ラインの彼方で」で倦んでいた。ヨーロッパ社会に溶け込むつもりでプロテスタントに改宗したが大学の職は得られず、機会があればドイツを離れようと思っていた。そこにパリで栄光の3日間にわたる七月革命が起こった。「フランスで七月革命の太陽が昇ったとき、わたしはまだ疲れを感じており、休息を必要とした。祖国の空気はわたしにとって日ごとに悪くなってきた。そしてわたしは真剣に空気を変えるべきだと考えていた。[24]」1831年4月、「シャンパンとマルセイエーズの祖国に[25]」旅立ち、5月のはじめにパリに到着する。1856年にパリで亡くなるまでの25年間をフランスで過ごす。文筆以外の糊口をしのぐ手段を知らないハイネは、ドイツにフランスの紹介を、フランスにドイツの紹介を仕事として始める。『フランスの状態』、『ルテツィア』などがフランス紹介であり、スタール夫人の『ドイツ論』を批判した新『ドイツ論』が、ドイツ紹介となる。ドイツにおいてユダヤ人としてアイデンティティに苦しんだハイネは、パリに来ることで三つ目の文化基盤をもつことになる。ユダヤ人にしてドイツ人、そしてパリジャン。パリでのハイリッヒ・ハイネHeinrich HEINEは、アンリ・エーヌ Henri HEINEと変貌する。

---

[23] SOURIAN (Ève); *Madame Staël et Henri Heine: les deux Allemagnes,* Didier, 1974, 198 p.

[24] HEINE (Henri); *Aveux,* cité par MAILLET (Marie-Ange); *Heinrich Heine,* Belin, 2006, p. 65.

[25] *Ibid.,* p. 66.

1833年春、雑誌『文学のヨーロッパ』に「ドイツ文学の現状」が、翌年の3月と、11・12月の『両世界評論』に「ルター以降のドイツについて」が掲載され、彼のドイツ論は展開される。ハイネの『ドイツ論』[26]の企図と構想がどのようなものであるか、すぐれた解題[27]を通して見ておこう。1803年と1808年にスタール夫人が訪れたドイツは、ゲーテのワイマールに象徴されるドイツであった。このドイツは「ナポレオンの支配下にある現代のギリシアである。丁度、アレキサンダー大王の支配下にあったアテネのように。しかし思想、芸術、学問においていかなる国よりも輝いていた。[28]」それに対して、ハイネが体験した1813年以降のドイツは、ゲーテ、ワイマール、そして彼らの新古典主義と訣別していた。ゲーテの芸術の時代からすでに政治の時代に移行していた。彼は、ボン、ゲッチンゲン、ベルリンの3大学で学び、とくにベルリンではヘーゲルの講義を聴き、時代の変化を確実に感じ取っていた。その一方で、ユダヤ人ハイネは、1821年はじめに、決闘を理由に大学を追放されたが、その理由はこの決闘だけとは考えられない。その背景にはユダヤ人に対する学生組合(ブルシェンシャフト)の迫害があるとみられる。1820年末にドレスデンで、「ユダヤ人には祖国がない」という理由で組合加入を拒絶された。ゲッチンゲン大学でも同様の決議がなされていた[29]。祖国の真の統一を願うハイネの政治思想は、ユダヤ人差別などを克服するために、民主主義さらには社会主義的性格を帯びることになる。彼のフランス革命への憧れは、彼の祖国への憂慮の表れでもある。

1830年の7月革命は、ゲーテの時代の終焉（1832年、ゲーテの死）を宣告し、新しい時代を画した。ハイネのパリへの事実上の亡命は、祖国ドイツとの訣別を意図していたわけではない。フランス人にドイツを紹介することを通じて、パリの地で新たにドイツを眺めることでもあった。時代的にも、ハイネの思想的傾向からも、この『ドイツ論』は政治的性格を強く帯びている。ドイツ文学を紹介するだけでは、真にドイツのことはわからない。そのためにはドイツ思想の歴史展望が不可欠である。ルターからヘーゲルに至るドイツの宗教と哲学を描かせた理由はここにある。また、学生時代に感じ取ったドイツの新しい精神的息吹とその力を、哲学と宗教に託して語ったものがハイネの『ドイツ論』である。

---

[26] ハイネの『ドイツ論』も、スタール夫人ほどではないが、版を重ねている。1834-35, 1835, 1836, 1855, 1867, 1868.

[27] GRAPPIN (Pierre) ; "Préface. *L'Allemagne telle que Heine la présentait aux Français.*", in: HEINE (Heine); *De l'Allemagne*, Gallimard, 1998, pp. 7-32..

[28] *Ibid.*, p. 9.

[29] *Ibid*, p. 17.

ワイマールでは、夢想の中で人は暮らしていた。しかしフィヒテやヘーゲルの弟子たちの新しい哲学は夢など見ていない。確かに観念論の哲学ではあるが、それは夢想をむさぼるものではなく、「閃光が雷鳴に先行するように、観念は行動に先行する[30]」。ドイツでは観念論哲学者は理想が先行し行動を決定する。観念が世界を変えることができ、またそうなるべきだと考えた。ヘーゲルの講義、自然哲学の研究、さらに古い民間伝承からハイネが学んだのは、このようなものであった。彼はドイツ思想史とフランス革命を並行的に比較する。ルターは自然権に肉を与え、「最高存在の祭典」を通じて「徳の共和国」をめざしたカントはロベスピエールに比される。フィヒテは至高の自我と実在の創造者を示したが、それはまさしくナポレオンだ。89年のフランス革命と同様に「ドイツ哲学は全人類にかかわる重大な事件である。[31]」ドイツ思想の革命は、フランスで起こった政治革命に似て、精神に起こった革命であり、それはいずれ行動へと転化される。「あなた方は神聖同盟全体よりも解放されたドイツに恐れをなした方がいい。[32]」

ハイネの語り口は予言者然としている。もちろん彼の理想主義がそうさせるのであろうが、懐疑主義者でもある彼の言は自信に満ちた断言的なものではない。彼の思想と文学にはつねにメランコリーがつきまとって離れない。彼の経済はパリでの収入だけでは足りず、ハンブルクの銀行家であるおじに頼っていた。ユダヤ社会になじめない彼はドイツでヨーロッパ社会に参入しようとプロテスタントに改宗するが、その彼を大学は受け入れない。自由の国、フランスでの『ドイツ論』は、フランス思想界のドン、ヴィクトール・クーザンの批判にさらされる[33]。晩年、脊髄を病み苦しんだ。彼の病は、ハイネの文学的メランコリーと思想的彷徨の象徴であるかのように。なによりも、安定しない彼のアイデンティティが、十九世紀のフランスとドイツの相貌を映し取ったと言えよう。

フランスの哲学者、エルム・カロは、ハイネの『ドイツ論』を十九世紀末にあってどのように評価したのか。ハイネの評価に移る前に、彼はできるだけ冷静になろうとしている。「激しく子どもっぽい熱気に引きずられないよう注意しよう。いかに正当な怒りであっても、それは悪しき判定者だ。不幸な出来事を恨んで共感を拒絶すると

---

[30] Cité dans *op.cit* de GRPPIN, p. 11.

[31] Cité dans *op.cit* de GRPPIN, p. 16.

[32] Cité dans *op.cit* de GRPPIN, p. 18.

[33] WERNER (Michael) & HAUSCHILD (Jean-Christopf) ; *Heinrich Heine, Une biographie,* Seuil, 2001, pp. 235-242.

したら、それは精神の弱さの証拠である。カントやシェリングは、いかなる場合でもわれわれの不幸に責任はない。[34]」このように心を静めて、カロはハイネのドイツ論の紹介とその批判に移る。では、スタール夫人の描く「あの美しい夢からわれわれを突然、連れ出したのは誰なのだ。[35]」もちろん、ハイネである。まず、彼はハイネのスタール夫人に対する皮肉を込めた批判を紹介する。「スタール夫人のドイツ、それは彼から見ると、《雲の懸かった精霊の国であり、そこでは力もなく身体をもたない人々が雪原を散歩し、道徳と形而上学だけを語り合っている。》[36]」この皮肉を放つハイネを、カロはヘーゲル主義者のアリストファネスと称している。さすがに雄弁家の誉れを得た者の評である。彼女への皮肉を紹介したあと、カロはハイネのドイツ論を自分のことばで簡潔にまとめる。「ハイネがわれわれにあり余るほど示してくれたのは、激しい欲望を備え、頑健な筋肉を有し、空気でできた身体などをもたないこの強力な民族を、われわれが見誤っていたということである。露と涙で命脈を保ち、天地のあいだでぶら下がっていたドイツ理想主義の亡霊は、ハイネの雨霰のように激しく、鋼鉄のように鋭い攻撃の前で消え去る。彼にとって、真実なのはまさしく対立である。彼の書物全体は、夫人と対立する見解の証明であり、才気に溢れ生き生きとした、きらめくような作品である。この亡霊をスタール夫人はシュペーの河岸である日、黄昏時見たように思ったのだ。[37]」

ハイネの『ドイツ論』の視点は、「宗教と精神主義的哲学の陰謀により長い間、虐げられ息の根を止められていた自然、その自然の巨大な目覚めというものである。まず、この視点を受け入れなければ、ドイツにおいてなにひとつ理解したことにはならない。ドイツ思想史全体はハイネには唯一、この目標、すなわち自然主義の到来に収束するようにみえる。ヘーゲルはその秘密の難解な開示者であり、ルター、カント、フィヒテそしてシェリングらは、この目標を自覚しない予言者である。[38]」カロはさらに詳しく論じ、ルターのたくましく世俗化した人柄を、「神官が妻をめとり、公明正大に子どもをもうけ、人間になった」と皮肉る。カントの『純粋理性批判』の偉業を賞賛し、「この出現はやはり、理神論の1月21日であり、エンマヌエル・カントは新しい革命のロベスピーエルである」と、カントのコペルニクス的転回（革命）を、

---

[34] CARO, *op. cit*, p.14.
[35] *Ibidem.*
[36] *Ibidem.*
[37] *Ibid.*, p. 14-15.
[38] *Ibid.*, p. 15.

王政の実質的崩壊を示す1793年１月21日のルイ16世の処刑になぞらえ、その立て役者ロベスピエールの役割に比する。「つづいて、ナポレオンのごとくフィヒテが現れ、国民公会を過去に葬り去った。ナポレオンとフィヒテは二人ながら、至高の自我であり、彼らにとって思想と事実は一つのものにすぎない。[39]」フィヒテから学んだシェリングに関しては、「フィヒテは理念により現実を構成しようと望むが、シェリングは事を逆転させ、現実から理念を引き出そうとする。両者、異なった形を取るが、スピノザの学説、自然主義への回帰である。」「歴史、政治、さらに宗教にこの自然主義を応用した者こそが、ヘーゲルである。・・・このように、哲学革命は完了する。ヘーゲルがこの大きな円環を閉じたのである。[40]」以上のように、カロはハイネの展開するドイツ思想史の「意味と目的[41]」を要約する。

さらにカロは自分の視点で要約したハイネの見解を批判する。その批判に入る前に、スタール夫人に対すると同様に、人物そのものを批判する。ハイネは1831年以降、死に至るまで25年間、フランスに滞在した、オランダでのデカルトのように。ハイリッヒ・ハイネは、パリでアンリ・エーヌと変貌した。世間の評判も大方はそうであった。しかしカロは言う。「ハイネにはコスモポリタンの雰囲気があると信じる人もいた。彼はフランス人だと言う人さえいた。これは完全なまちがいだ。[42]」フランス側の歓迎によって、そのように見えただけである。「そうではなく、その心はドイツ人のままだ。偉大なる理念が、民族全体と同様に、彼を虜にしている。[43]」

では何故、人はハイネをドイツ人だと見抜けないのか。彼の才気と彼のプロシア批判のせいである。「詩人の友人らがハイネの思想について誤解する羽目になったのは、彼がドイツ野郎とその下品さ、さらに〈〈やつらの外国に対するばかげた嫌悪〉〉を、容赦なくむち打つあの才気のせいだ。偉大なる理念がベルリンの田舎地主や敬虔主義者の手中に納まるのを、彼は決して望まなかった。〈〈ごちごちの軍国主義〉〉と彼が不遜にもそう呼ぶものに耐えられないのだ。」しかし彼の才気に惑わされてはならない。いまはそんな時ではない。「われわれの現状では、その延々とつづく辛辣な風刺など繰り返し聞く喜びを拒絶すべきだと思う。そんなもの、危険はないとしても価値もない。いまわれわれが耐えているこの不幸は、警句などで癒されるようなものではない。」

---

39 *Ibidem.*

40 *Ibid.*, p. 15-16.

41 *Ibid.*, p. 16.

42 *Ibid.*, p. 17.

43 *Ibidem.* 強調はカロ。

カロはパリのアンリ・エーヌをそのフランス的性格において認めないばかりか、彼の『ドイツ論』の内容に立ち入る手前で、彼の才気や風刺的精神を自分たちのものではないと、はねつける。要するに、ハイネはフランス人ではないし、悲しみをともにする仲間でもないと。しかし冷静を主張するカロの感情と底意が、ここに垣間見える。

『ドイツ論』の内容の批判は、ルターからヘーゲルに至る偉大な理念の歴史に対するきわめて粗雑な対独復讐の情念に煽られたものである。「偉大な理念の命令にしたがうのは、夢想家、学生、そして哲学者といった続々とやってくる恐ろしい軍隊である。・・・ほら、カント主義者がやってきた。彼は、観念の世界と同様に現実の世界でも、敬虔について語るのを聞こうとはしないだろう。その心は伝統の敬愛などで決して動かされないからだ。今度は武装したフィヒテ主義者だ。彼は危険を軽蔑している。そんなもの、彼らには現実の中にはないからだ。彼には、死も、殉教さえも、純粋な仮象に見えるのだ。恐怖も利害もこの狂信的な意志を打ちのめすことはできないだろう。[44]」ルターをとばし、シェリングに触れず、まとめはヘーゲルかと思いきや、そうではない。「しかし最も恐ろしいのは、自然哲学者たちだ。古代ゲルマニアの戦士たちの残虐さが、彼らの心で目を覚ました。自然哲学者たちは破壊するために、大地の根元的な力とよしみを結ぶだろう。・・・太古のゲルマン的汎神論の伝統を呼び覚ますだろう。太古の戦士たちの神々が、彼らのまわりで立ち上がるだろう。トール神が、巨大な金槌をもって立ち上がるだろう。[45]」ヘーゲルをとばして、ドイツの偉大な理念は、スピノザ主義にゲルマンの神々を混交した土着的自然主義へと還元される。もちろん、ハイネの意図していたドイツ思想史の展開とは異なるものだ。あえて言えば、ハイネの哲学史的展開に、ドイツ民族的、民衆的文学遺産から得たハイネの文学的成果を混合したものと言える。それも、ハイネの意図を無視し、思想史という理性的部分に、文学という感性と情念の部分を、無遠慮、無批判に、しかも対独復讐の情念に駆り立てられて加えたと言ってよかろう。

ハイネ批判をまとめるように、カロは次のように述べる。「巨人の目覚めに立ち会っているようだ。巨人は立ち上がり、自分のまわりを眺める。長い間、眠っていたのだ。その百年の眠りが魔術的な力をもった帝国にゆだねられた。・・・この巨人の頑強な知性は、夢想の郷から、事物の実質的で芳醇な詩作（制作）へ、あるいは神秘的な宝を得させてくれるはずの科学へと方向を変えた。また、新たに土、水そして火の元素

---

[44] *Ibid.*, p. 18.

[45] *Ibidem.* トールは、ゲルマン族の神で、雷鳴、雨、豊穣を司る大気の神であり、また巨人や蛇と戦う戦争の神でもある。

とかかわった。しかしもはや、それは呪文や魔術の決まり文句ではなく、計算と数字でなされた。この新しい魔法使いこそが、これら元素たちを自分に仕えさせ、地上の帝国を得させしめるのである。確かに、巨人は目覚めた。」このカロの不安と驚嘆に、ナチズムの到来を予想するのは時代錯誤である。またもちろん、ハイネの予想や期待をもはるかに超えている。それはすなわち、独仏戦争の敗北に衝撃を受け、自失呆然とし、とまどい、考え、呻吟するフランスのエリートの姿である。冷静を宣言し、それに努めてきたはずの哲学者の動転であり、自己へのいらだちである。悲劇への贖罪意識とその原因究明への意志という〈対独復讐〉の二つの本質から見ると、それは確かに、彼の『苦難の日々』の序文に示されてはいた。しかし実際には、彼の論述では、贖罪の意識は少なく、原因究明の意志はあれども、その着実な努力と成果は乏しいものがあると言わざるをえない。

最後にカロは冷静さを取り戻し、語る。「二つのドイツ論には相対的な真理がある。そうだ、スタール夫人のドイツはどこかに存在した。彼女は、ドイツ・リートが栄えた古き時代に、クルップ製の大砲の時代以前に、その時をもっていたのだ。十八世紀の終わり頃までに、そのような特徴をもったゲルマニアがあったに違いない。それは感情のドイツである。・・・しかしながら、このドイツは次第に消滅した。・・・別の活動的で頑強な、それでいて恐るべきドイツが、それにつづいた。知性と力のドイツである。」「力。そうだ、おそらく。それは一民族の偉大さの要素だ。知性がもう一つのものである。しかし力をともなっただけでは、知性は十分ではない。知性は無限に増大し、本質を変えることはない。知性は道徳的次元では、力になにも加えない。正義の感情、権利の尊重だけが、一民族の性格を聖別し、そして偉大さに最後の一筆を加えるのである。」

少し冷静になったカロは、彼の論述の矛盾に気づいていただろうか。「カントやシェリングは、いかなる場合でもわれわれの不幸に責任はない」と言っておきながら、カント主義者に太古のゲルマン的汎神論の再生における先兵の役割を担わせた。また、スタール夫人の『ドイツ論』を非現実的と評しながら、十八世紀末までは存在していたと言う。「不幸な出来事を恨んで共感を拒絶するとしたら、それは精神の弱さの証拠である」と言いながら、共感を拒絶してはいないだろうか。冷静を旨としながら、そうはできないほどに、「われわれの征服者の野蛮さと内乱の錯乱状態[46]」に傷ついていたのだろうか。哲学には基本的に普遍主義の要素が強く、彼の標榜するクーザン

---

[46] CARO; *Jours d'épreuve 1870-1871*, Avant-Propos, p. 1.

の折衷主義もまたそうであろう。他の思想の影響を認め、それをみずからに統合しようとする思想的契機が、折衷主義にはあるが、そのような思想的基盤はもろくも崩壊したのであろうか。カロは、スタール夫人の『ドイツ論』を彼女のナポレオン体制批判の映し絵であると批判し、またハイネのものを道徳と正義なき古代的自然主義の復活の提示だと告発した。そのカロ自身の「二つのドイツ論」も、独仏戦争敗戦の衝撃による対独復讐の情念から噴出した己の立場からするドイツ論であった。思想的探究は普遍性と客観性を主張しながらも、おのれの特殊性から抜け出すことはむずかしい。それが現実の政治、歴史的状況に深くかかわるものであれば、それだけ一層そうである。しかし、カロに普遍性の契機がまったくなかったとは言えない。〈冷静〉と〈共感〉の必要を主張した点がそうである。しかしまた、それは実現されることはなかった。これがかろうじて、彼の論述をショービニズムから救い出すものだろう。彼のドイツ論の結論は、力のドイツが現在のドイツであり、フランスへの脅威であるとするものだ。この〈二つのドイツ〉のイデオロギーはそれ以降定着するが、対独復讐だけが強調されたわけではない。台頭するナショナリズムに対して、左翼は自由で反教権的なドイツにあこがれた。負けたのはフランスではなく、ナポレオン３世であり、断罪するべきはドイツではなく、戦争そのものであり、敗戦の真の原因はドイツにおける教育の優位だと若い世代のいう論調もこれを支えた。[47]

しかし一方で、カロの言う「共感」を求めた思想的営為もあり得るであろう。その努力を、エルネスト・ルナンのドイツ論に見ることが可能であろう。いかにそれが苦渋に満ちたものであっても。[48]

---

[47] ZELDIN (Thedore); *Histoire des passions françaises*, Payot & Rivages, 1994, t.1, pp. 558-559.

[48] 時間と紙幅の関係で、エルネスト・ルナンを論じることができない。カロとの比較において少しコメントしておく。

ルナン(1823-1892)は、1797年生まれとされるハイネとは、一世代あとの人物で、1850年代に青春を送った世代である。ルナンはハイネの『ドイツ論』、とくに1855年刊行のそれに触れる機会があったはずであるが、この書への言及はないし、ハイネそのものへの言及も少ない。彼はスタール夫人の『ドイツ論』に影響を強く受けている。

カロは1826年生まれであるから、ルナンと同世代にあるが、その教養形成はまったく方向を異にしている。カロはノルマリアンで、順当にリセ、大学、学士院と学者としての地位を築いてきた。それに対して、ルナンはサン・シュルピス神学校に入学して、聖職者の道を歩むはずであったが、1845年10月６日、「再び法衣を着ては昇らぬ覚悟で、サン・シュルピス神学校の石段をおりた。」(ルナン『思い出』(上) 杉捷夫訳 (岩波文庫) p. 109) を退学して、オラトワール派のコレージュ・スタニスラスでの舎監の職を結局断り、私立の寄宿学校で復習教師として、当座の糊口をしのぐ。コレージュ・スタニスラスは奇しくもカロが学んだ学校だが、彼はすでにエコール・ノルマルに進学している。彼ら二人の教養形成は、教会と国家という対立する制度のもとでなされた。そし

文　献

- AZOUVI (François); *De Königsberg à Paris. La réception de Kant en France(1788-1804),* J. Vrin, 1912.
- CARO (Elme); "Les Deux Allemagnes. Madame de Staël et Henri Heine", in: *Revue des Deux Mondes,* 86 (nov.-déc., 1871), pp. 5-20.
- --- ; *Jours d'épreuve 1870-1871,* Hachette, 1872,
- DIDIER (Béatrice); *Madame de Staël,* Ellipses, 1999.
- HEINE (Heine); *De l'Allemagne,* Gallimard, 1998.
- ハインリッヒ・ハイネ、木庭宏責任編集；第4巻『文学・宗教・哲学論』、森良文訳「ドイツの宗教と哲学の歴史によせて」京都：松籟社, 1994.1
- ハインリッヒ・ハイネ、伊東勉訳『ドイツ古典哲学の本質』、岩波書店（岩波文庫）、1973 .
- KNOOP (Von Bernhard); *Hegel und die Franzosen,* W.Kohlhammer: Stuttgart und Berlin, 1941, pp. 31-41.
- MAILLET (Marie-Ange); *Heinrich Heine,* Belin, 2006.
- *Philosophie, France, XIX siècle. Ecrits et Opuscules,* Choix, introduction et notice par Stéphane DOUAILLER, Roger-Pol DROIT et Patrice VERMEEREN, Le livre de poche, 1994.
- SOURIAN (Ève); *Madame Staël et Henri Heine: Les Deux Allemagnes,* Didier, 1974.
- STAËL (Germaine NECKER, dit Madame de); *De l'Allemagne,* Garnier-Flammarion, 1968,
- スタール夫人、梶谷温子他訳『ドイツ論』全4巻（鳥影社）2000.
- WERNER (Michael) & HAUSCHILD (Jean-Christopf); *Heinrich Heine, Une biographie,* Seuil, 2001.
- ZELDIN (Thedore); *Histoire des passions françaises,* 2 vol., Payot & Rivages, 1994.

事典類

- *Dictionnaire universel des contemporains, contenant toutes les personnes notables de la France et des pays étrangers...,* éd. par VAPEREAU (Gustave), Hachette, 1858.
- *Grand dictionnaire universel du XIXe siècle,* éd. par LAROUSSE (Pierre), Administration du grand Dictionnaire universel, 1866-1877, suppelément, II.
- *La grande encyclopédie, inventaire raisonné des sciences, des lettres et des arts, par une société de savants et de gens de lettres* ; sous la dir. de MM. Berthelot,... Hartwig Derenbourg,... F.-Camille

---

て両者とも、1848年に教授資格試験に、クーザンの審査のもとで合格したが、ルナンはクーザンの勧める地方への就職を蹴っている。

カロのドイツへの関心は哲学者のそれであるが、ドイツに対して共感をもって行われたものではない。クーザンの折衷主義は、七月王政の〈正義にかなった中庸（中道）Juste Milieu〉の哲学的表れであり、第二帝政に対してクーザンは膝を屈することはなかった。しかし折衷主義そのものは、帝政下でも中等教育、哲学研究の一翼を形成した。それに対して、ルナンのドイツへの関心は、きわめて共感をともなって形成されてきた。「聖書解釈とセミチック言語学の研究必要が、ドイツ語を学ぶことを私に強制した。・・・前世紀末と今世紀の前半のドイツ特有の精神は私を驚かせた。**私は神殿の中へ入ったような心地がした**(Je crus entrer dans un temple, …)。これこそ私がさがしているものだった。」（ルナン『思い出』下pp. 79-80。強調は論文執筆者）ルナンの『思い出』は『両世界評論』に書きためられたものを、1883年に出版されたが、引用したこの文とほぼ同じものが、1845年8月24日、ジョゼフ・コニャ宛書簡に、「私はドイツを研究した。**私は神殿の中に入った心地がした**(J'ai cru entrer dans un temple, …)。」さらに、1845年9月22日、

Dreyfus,... A. Giry,... [et al.], H. Lamirault : [puis] Société anonyme de "La Grande encyclopédie", [19??]
- *Dictionaire de l'Histoire de France,* sous la dir. de Jean-François SIRINELLI, Larousse, 2006, p. 982.
- *Le nouveau dictionnaire des œuvres de toute les temps et de tous les pays,* éd. par LAFFONT-BOMPIANI, Robert Lafont, 1994.
- *Dictionnaire des œuvres littéraires de la langue française,* éd. par Jean-Pierre de BEUAMARCHÉ et Daniel COUTY, Bordas, 1994.
- *Dictionnaire des philosophes,* dir. par Denis HUISMAN, 2e éd., P. U. F., 1993.

姉アンリエット宛書簡にもある。「こんなにも純粋で、高貴で、道徳的で、宗教的なドイツ文学を観照するとき、その最も高貴な意味において、**私は神殿の中に入った心地がした**(J'ai cru entrer dans un temple, …)。」ドイツの批判的文献研究に触れ、ドイツへの共感をもちはじめ、それは生涯変わることない。1870年8月から始まるドイツの宗教学者、シュトラウスStraussとの論争においても、このことばが再び述べられる。「わたしがゲーテとヘルダーを通じてドイツを知り始めたのは1843年頃、サン・シュルピス神学校においてでした。**私は神殿の中に入った心地がした**(Je crus entrer dans un temple, …)、そして・・・」少なくとも4度、ルナンは「神殿」と叫んでいる。

ドイツへの心酔ともいえるルナンの体験が、のちの『イエス伝』を書かせ、1870年の悲劇において、彼のドイツ観の変更を強いたことは明らかである。彼のドイツ体験、〈二つのドイツ〉は、カロのものとは根本的に異なる。さらにルナンは、対独敗戦を受けて、「諸国が連邦的条約により結ばれたヨーロッパ合衆国」の構想を述べる。彼のドイツ論はカロのフランス的中庸Juste Milieuによる中華思想とは異なる側面を有する。それは真に彼のドイツ体験に由来するものである。